

中国における日本語専攻学習者の日本認識の形成および修正について

著者	趙 琳
ファイル(説明)	博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第41号
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031485

学位論文の要旨	
氏名	趙琳
学位論文題目	中国における日本語専攻学習者の日本認識の形成および修正 について
<p>本論文は中国における日本語専攻学習者を相手に、インタビューなどの質的研究方法を用いて学習者らの日本認識の形成及び修正のプロセスを論じたものである。日本語学習者数が世界最多の中国においては、学習者の大半が大学などの高等教育機関で日本語教育を受けているのが特徴である。筆者は中国の大学に勤めている日本語教師として、日常日本語教育と学習者と接してきた。そして、その中の問題点も目にしてきた。「異文化理解」や「異文化コミュニケーション」をモットーに掲げている日本語専攻教育だが、学習者はそれを通して日本に対してどのような認識ができたのだろうか、一度できた認識は実際に日本に滞在するとなるとなんらかの修正があるのか、仮にある場合、どのようなきっかけでどのように修正していくのだろうか、上記の疑問を明らかにするのは本論文の動機である。</p> <p>本論文は四章からなっている。詳細は以下に示した通りである。</p> <p>第一章は論文の背景、目的、先行研究の他、本論文で使われる理論について整理した。まず、異文化コミュニケーションに関する理論を概観し、その理論のもとで、本論文で取り扱われている概念、研究手法を明らかにした。次に、「日本事情」教育研究史を中心に、日本語教育における「文化」の扱いを論じた。「文化」理解の主幹科目としての「日本事情」研究の歴史をたどることは今後の道しるべを示すのに必要になるからである。最後に、文化人類学的なアプローチという本論文の研究視点を論じた。つまり、文化相対主義の角度からの分析を試みる。</p> <p>第二章は、日本語専攻学習者の日本認識の形成について論じた。専攻学習者は来日する前に、大学で日本語をはじめ、日本社会や文化についての知識をインプットしてきた。実</p>	

際日本人と接する機会が限られているが、教科書や日本語教師、マスコミを通して、日本に対する認識を作り上げてきたと思われる。この章では、まず、背景知識として中国における日本語教育の歴史と現状を振り返ってみる。国の教育指針のもとで行われている中国の日本語専攻教育は均質的で、地域差があまり見られないのが特徴である。次に、学習者の日本認識の形成に最も影響を与えている「教科書、教師、マスコミ」の三つの角度から分析を行う。学会で発表した「日本語教科書が学習者の文化認識形成に与える影響について」という論文をメインに分析を行う。

第三章は、異文化接触による日本認識の修正について論じる。来日前の日本語専攻教育で日本についての知識をインプットされてきた学習者は、実際に来日し日本という「異文化」社会に接触した中で、一度形成された日本認識は来日後どう変わるのか、事例を通してみていく。この章では、「短期接触」「中期接触」「長期接触」の三つの部分からなっている。短期接触について、筆者が昨年に訪日した大学生研修団に同行した際の記録と学生の報告書を中心に分析したうえで短期接触の特徴を明らかにする。中期接触については、滞在経験者に行うインタビューをもとに考察を行われたが、その知見は「来日後の文化接触が日本語学習者の日本認識の修正に与える影響について—インタビューによる質的調査を中心に—」と論文の形で『地域政策科学研究』で発表した。長期接触について、長期滞在者の事例をもとに分析を行い、中期滞在と異なる文化理解の特徴を見せている。

第四章は、全体の内容をまとめたうえで本論文の考察を行う。主に文化の相対化、適応、変容、異文化教育の視点から考察していく。特に、異文化理解の教育とトレーニングについて、日本語教育現場で実施する可能性と方法について検討してみる。短期滞在者の体験は「表層学習」であるため、訪日前に規範やエチケットのような知識を与えれば効果的である。一方、留学するために訪日する学生には、異文化摩擦や誤解の事例を使うグループ活動は効果が期待できる。さらに、その事例についての分析を教材や授業中に取り入れたら、学生の異文化理解に一助けになるのであろう。日本語専攻学習者の日本文化習得のプロセスを明らかにすることで、問題点を示し、その知見を教育現場に還元し、今後の日本語専攻教育に対して、教材開発や教授法の改善に提案ができれば幸いである。